「捨てられた悲しみ」（光村１年ｐ102「生命の尊さ」）

１．本教材について

▼本教材のテーマは、少なくない人々の生活にとって、なくてはならない存在になっているペットの「死」についてである。

▼1 年生の教科書には「死」について考える教材が他に三つある。「エルマおばあさんからの『最後の贈り物』」は、病気で余命があまりないということがわかったエルマおばあさんの「死」の迎え方を、「さよならの学校」では「死んでいくものを見送った孫の立場」を、「ひまわり」では災害によって身近で大切な人が突然亡くなり、その死に向き合わなければならなくなった人をテーマにしている。いずれも「死に向き合い」、「死について考える」ための教材と捉えることができる。いずれにせよ、「死」を考えることは「生」を考えることだ、ということを踏まえたい。

▼2,3 年生にも「尊厳死」や「臓器移植」について考える教材があるので 3 年間で計画的に「死に向き合い」、「死について考える」教育をすることを考えると良いのではないだろうか。その点、本教材は死について扱う「入門編」として取扱やすいのではないかと思われる。ペットについて扱った漫画もあり材料に事欠かない。（参考資料参照）

▼教科書での記述は、ペットが捨てられ、何万頭も殺処分（さつしょぶん）されていること、その数を少しでも減らそうという活動をしている人がいること、県などの保護センターでは引き取りも行うことができるようになり、新しい飼い主を見つけようとする努力が行われていること、地域で「動物とのふれあい方教室」などの試みが始まっていることなど書かれているが、子どもたちが自分たちで最新の状況を調べて、考えていくことを促したい。

▼ペットが老衰のため動けなくなったり、病気で寝たきりになった時は医師の手によって安楽死させるという選択肢もあるが、医師は断ることも多いという。飼い主の中にはあえて安楽死させず、看取る人もいる。家族の中で意見が分かれることもある。

▼動物については、ペット以外にも野生動物、家畜、動物実験などについてなどさまざまな問題がある。動物の権利などという考え方も生まれているので、整理しながら考えていく必要がある。

▼本文末尾の「学びのテーマ」の中に「人はどうしてペットを飼うのだろう」「動物保護や『殺処分ゼロ』」の実現を目ざす活動について、調べてみよう」「「身近な動植物の命の尊さについて考えてみよう」という問いかけがあるので指導過程の中で活かしたい。

▼授業者が結論を持って授業に臨むのではなく、子どもとともに考えていく授業にしたい。

２．本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

▼言うまでもないが、「死」について考えるに際し、特定の考え方を強制することは慎まなければならない。

▼子どもたちにとって、比較的、関心のあるテーマなので、意見が出やすいと思われる。子どもの意見を尊重しながらともに考えていくことが必要である。

3. 指導過程（2時間程度）

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	p66のポスターやp68の写真を見ながら今日 のテーマは、ペットの「死」であることを告げ る。	
展開	あらかじめペットの死に出会った子どもがいるかどうか調べておき、その体験を話すことのできる子どもがいれば聞く機会を設ける。 子どもに話を聞くことが無理なら授業者の体験、あるいは授業者の知り合いの体験を話す。 教科書を一通り読む　グループに分かれる 66pのポスターはだれが作ったものだろう →動物愛護協会というものがあること、どんな活動をしているか調べてみよう →ペットを飼っていた人が環境の変化などにより飼えなくなってしまったら、どうすればよいのか、調べてみよう グループに分かれ、ペット、中でも犬や猫が飼われている数、殺処分される数などを調べる。宿題にしておくことも考えられる。各グループで発表する。 身近な地域でペットの保護活動を行っている団体やそういう団体がどんなことを目標にしているかを調べてみよう 各地の保護センター(愛護センター)がどういう取り組みをしてきたか、調べてみよう ペットを飼うと、どんな責任が生じるか、考えてみよう。	ペットの保護に携わっている方の話が聞けると良いが、難しければ授業者が団体に出向いて取材しておくこともできる。 教科書は時間をかけて読む パソコンルームがあったり、タブレットが使える場合は各グループで調べる。 参考資料２ 参考資料２ 保護団体についてはHPを立ち上げていることが多いので、比較的簡単に調べられる。自治体の取り組みはわかりにくいので、神奈川の取り組みを紹介しても良い。参考資料５
まとめ	各グループで今日調べたことをまとめ、ペットの命についてどんなことを考えたか、感じたか、話し合ってみよう。	特にまとめる必要はない。

参考資料

資料１　動物の「死」を扱っている漫画

▼「IWAMAL/岩丸動物診療譚」玉井雪夫　ビッグコミックス　1997年

考えさせる漫画作品が多く含まれているが、特に診療譚９「最期のペット」がおすすめ。死期が迫っている犬が岩丸のところへ母子の手によって持ち込まれる。ところがこの犬は死期が迫っている

にもかかわらず妊娠していた。母親は犬の年齢もわからないような人だが、「子どもの前で死などという刺激の強いことは言わないで欲しい」「実際の処理は任せる」などと言って岩丸を怒らせる。

▼荒川弘「銀の匙」小学館　2011 年

北海道の農業高校に入学した八軒君はほとんど唯一の「街場の子」。初体験で戸惑うことばかり。かわいい子豚に名前をつけようとして「その子に名前つけちゃだめ」「ペットじゃないんだから」と言われて「豚丼」と名付けるが、わずか 3 ヶ月でベーコンになると聞かされ、ショックを受ける場面がある。「街場の子」がいれば八軒君の悪戦苦闘を見て、考えることが多いのではないだろうか。ちなみに酪農科のある農業高校では動物の出産、生育、屠畜は一連のことである。

資料２　青森の農業高校の実践から

殺処分された犬や猫の骨は廃棄物として処理されることが多い。このことに関心を持ち、廃棄物として処理されることにやりきれない思いを感じた青森の農業高校の生徒たちが、骨を砕いて肥料にし、花を育てる試みをしている。彼らは育てた花を“命の花”と呼んでいる。こうした高校生の取り組みを紹介しながらペットの命について生徒とともに考えることもできる。（毎日新聞 2015 年 2 月 22 日、ハフポストにも記事が掲載されている）

神奈川県には動物愛護センターの中に焼却し､埋葬する場所がある。また、お寺の中にも埋葬し、慰霊する場所を設けているところがある。

資料 3「ペットの死」について考えることのできる映画

「豚のいた教室」

小学生がグランドの片隅で、食べるために豚を飼う。小さかったブタが手に余るほど大きくなった時、小学生は卒業していくことになり、ブタをどうするかが大問題となった。P ちゃんと名づけられたブタを食べるのか。長いながい子どもたちの討論が始まる。大阪の小学校の実践を元にした映画。

資料４　子どもたちと WEB などで調べるときの参考

▼殺処分などについてのデータ

環境省のデータ：https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html

▼NPO の活動について

Peace Wanko Japan という NPO のホームページ　https://peace-wanko.jp/action_policy.html

Peace という NPO のホームページ　https://animals-peace.net/law/saitama_poster.html

他にもいろいろあります。

▼神奈川県の「飼い主のいない猫対策 ガイドライン」

http://www.pref.kanagawa.jp/docs/y5c/kankyoeisei/documents/914001.pdf

神奈川県では、殺処分ゼロを継続しているが、行政、ボランティア、獣医師の負担が重い。そのため、特に全国的に殺処分の多い猫について行政が引き取らなければならない数を減らす必要があるという認識から「飼い主のいない猫対策 ガイドライン」を作成して周知している。なお、神奈川県のホームページから愛護センターにもアクセスできる。

▼動物 愛護管理施策に関する 検討会報告書(神奈川県)平成 30 年

殺処分ゼロの取り組みを早くからすすめてきた神奈川県が現在どのような問題にぶつかっているかを理解することができる資料

▼各地の保健所にアクセスすると収容している動物の公示をしている場合がある。

資料５　神奈川動物保護センターの取り組み

神奈川県の動物保護センター では、 犬 は６年間、猫は５年間 の殺処分ゼロ を継続している。殺処分をしていた時代からさまざまな試みをして、現在は殺処分ゼロを継続している。

その試みを紹介する。

・早くから、不妊去勢手術と基本的なしつけを済ませて譲渡会を実施していること

・子犬の里親デーを実施している。後日、里親を対象に「愛犬教室」を開き、さまざまな知識のレクチャーを行っている

・譲渡に際しては終生飼養できる人に限って譲渡している

・譲渡に際しては管轄外の人に譲渡しない。譲渡後も適正な飼育が行われているかどうか監視、

指導するため。

・「ふれあい動物広場」の開園。引き取った子犬を中心に小動物と触れあうことができる広場である。

・小学校高学年を対象とした「夏休み小動物飼育体験教室」の開催。

・県民を対象とした「動物愛護の集い」の開催。

・「しつけ教室」や訓練犬のデモンストレーションの実施。

・「コンパニオンアニマル活動」（特別養護老人ホーム等への訪問）の実施。

補論　本教材にある「人はどうしてペットを飼うのだろう」「身近な動植物の命の尊さについて考えてみよう」を授業にしてみました。

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	人はなぜペットを飼うのだろう？	子どもたちに自由に意見を言ってもらうと良い。神奈川子供医療療育センターでは、入院している子どものために犬が活躍している。また、介助犬、盲導犬等、人間のために活動している犬は多い。
展開	一方で人間は命あるものを食べている。現在どのくらいの動物を食べているか調べてみよう。 野生動物も食べているが、ほとんどが家畜である。 一例として鶏がどのような環境で飼われているか、調べてみよう。 また、家畜として高く売るためにはさまざまな掛け合わせも行われている。 家畜が食肉になるまでにどんなことが行われるか調べてみよう。（参考資料１,２参照）	人間が食べているのはそのほとんどが(植物を含めて)命あるものである。一年間で食べる豚は 16,183,495 頭(2004 年)。（「いのちの食べ方」） 鶏などは、飼われている環境が劣悪すぎるという指摘があり、動物保護の観点から動物飼育の環境改善などに取り組む団体がある。 動物や植物のいのちを食べて人間の生活が成り立っていることを具体的なイメージを伴って理解したい。
まとめ	日本人が毎年食べている肉（牛、豚、鶏）は約 300 万トン。食べられるのに捨てられる食品ロスの量は 640 万トン。このことをどう思	肉を食べなくても肉のエキスはスープの素など多くの食品に使われている。また、犬や猿、

	う？自分の食事をふり返ってみよう、と呼びかける。(参考資料４)	ウサギなど薬や化粧などの動物実験に使われている動物も多い。

参考資料

資料１　映画「いのちの食べ方」

ニコラウス・ゲイハルター監督作品。ドイツ・オーストリア映画。一切の BGM を排して牛などの動物、魚、トマトやアスパラガスが食卓に上がるまでのことを映像にしている。「牛がお肉になるまで 」「豚がお肉になるまで」では、屠畜の様子をリアルに見ることができる。全体は 92 分。

資料２　「いのちの食べ方」　森達也　理論社

映画監督であり、テレビディレクターである著者が、人間は毎日のように肉を食べているのにその肉がどういうふうにできるのかを知らない、知らないなんてなんだか落ち着かない、だから知ることにした。君にも知ってほしい。目をそらさずに読んでほしい、として書いた本。子どもたちに呼びかける形で書かれている。「よりみちパン！セ」シリーズの１冊。

〈牛や豚が食品になるまで〉「いのちの食べ方」より

牛の場合

①体を洗われる　②1 頭がやっと通れる通路に追い込まれ、ノッキングを受ける。細い針を額に打ち込まれ､脳しんとうを起こして硬直する　③通路の側面の鉄板が開かれ、意識を失っている牛は 1.5M ほど下の床まで滑り落ちる　④数人が牛を取り囲み、一人が眉間に開けられた穴から金属製のワイヤーを差し込む　ワイヤーは脊髄を破壊し、全身がマヒする。同時に一人がナイフで頸動脈を切断。大量の血がほとばしる。天井に取り付けられたトロリーコンベアから下がる鎖に片足を引っかけて逆さまにつり下げられる。

⑤牛はまだ死んではいないので、血液は大量に放血される。⑥頭を落とされ、牛は各パーツに切り分けられる。皮、内臓を切り離し、背割りも行われる。切り分けられた内蔵はお湯で洗浄される。屠畜は、長年の経験と高い技術によって支えられている重労働でもある。

※豚はノッキングではなく、炭酸ガスで仮死状態にされる、後は同じ。

資料３　東京芝浦の屠畜場を見学したときのことが参考文献とともに、わかりやすく下記の URL にアップされている。芝浦の屠畜場は都民の食卓を支えている。

https://esprit.hateblo.jp/entry/2016/06/04/210000

資料４　食品ロスについて（環境省 HP、政府広報オンラインより）

食品ロスの発生原因としては次のことが指摘されている。

・家庭から出される食品ロスとしては食品の消費期限、賞味期限きれなどによる廃棄、食べ残し
・小売店では賞味期限が切れる前に販売期限を設定して廃棄するという商慣習
・品切れになることをおそれ、売れ残ることを想定して仕入れ、余ると廃棄する